



『環境・循環型社会白書』が刊行されました

今年から、『環境白書』と『循環型社会白書』が、一冊にまとめられることになりました。

低炭素社会を目指して

環境白書の今年の特集テーマは、「進行する地球温暖化と対策技術」です。国連の「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」の第4次評価報告書を中心に、進行する温暖化の現状を紹介。このまま温暖化が進むと人類の生存基盤である生物多様性に大きな変化が生じ、農・畜産業、水産業、健康、文化に多大なる影響を与えると警鐘を鳴らしています。

こうした事態を回避するためにはどうすべきなのか？ 白書では、公害などを克服してきた日本の技術が大きな役割を果たすことを強調しています。温暖化対策に関しても、例えば、高効率な省エネ家電製品や、電球形蛍光灯、ハイブリッド自動車などが紹介されています。今後も環境技術の開発と普及をさらに進めることで、温暖化防止に大きく貢献できるとしています。最後に、これらの技術に加え、技術を社会に普及させるための制度面の改革と、国民一人ひとりの意識改革、ライフスタイルの転換など行動面の改革が一体となって、「低炭素社会」を作り上げていくことを呼びかけています。

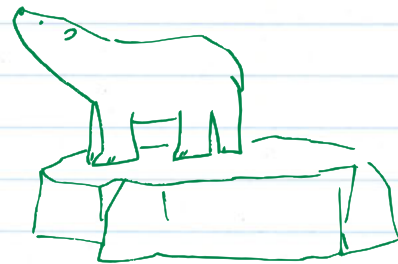


3Rが世界を救う!?

循環型社会白書の特集テーマは、「循環型社会づくりを支える技術—3R・廃棄物処理技術の発展と変遷—」です。まず、アジアを中心とした経済成長と人口増加に伴って、2050年には世界の廃棄物発生量が2000年の2倍以上になるとの予測を紹介。同時に世界の資源・エネルギーも逼迫することから、日本が提唱した3Rイニシアティブを推進することが国際社会においてますます重要になるとしています。

循環型社会を支える技術として、衛生面の向上を図る廃棄物関連技術、廃棄物中の有害物質を除去し、二次公害を防ぐ有害物質対策技術、日本の優れた3Rを支える技術などを取り上げ、こうした技術の開発・導入を促進する政策や制度などについて説明しています。これらの日本発の3R・廃棄物処理技術は、特にアジア地域における廃棄物の適正処理や3Rの推進に大きく貢献できるとしています。

そして最後に、今後の3R・廃棄物処理技術の発展と国際貢献のあり方について解説しています。



平成19年度版『環境・循環型社会白書』（定価：2800円 税込）は、全国の書店で発売中です。

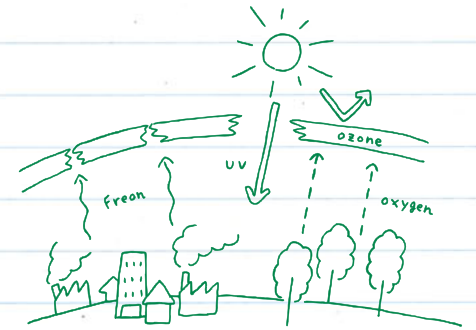
環境保全に再チャレンジ!

失敗しても何度でも再チャレンジができ、努力が報われ、働き方、暮らし方が多様に選択できる社会。そんな社会を目指すため、昨年12月に政府の取り組みをまとめたのが、「再チャレンジ支援総合プラン」です。

このプランの対象者には、再チャレンジしようとするフリーターや子育て女性はもちろん、これまでとは違った生き方にチャレンジする退職した団塊の世代なども含まれます。

環境省において実施されている支援策は、主に後者の人たちを対象としたものです。これまでとは違った生き方にチャレンジする団塊世代の受け皿としては、「里地里山・里親事業」があります。これは里地里山保全に関心のある団塊の世代の方々が、現地のNPO活動に参加できるよう相談にのったり、活動場所を斡旋したりする事業です。また、適切にアドバイスができる専門家を紹介したり、基本的な技術の習得ができるような講習会を開催したりもします。

その他にも、自然学校のインストラクターやエコツアーのガイドなどの人材を育成する事業や、環境保全活動に取り組もうとする市民や事業者に対して助言を行う人材を、「環境カウンセラー」として登録し、活用することもこのプランには盛り込まれています。



オゾン層を守るために

南極上空のオゾンホールは、日本を含めた世界各国の取り組みによって、近年、その拡大傾向は収まりつつあります。しかし、毎年9～10月には最大規模まで拡大するという傾向は変わらず、オゾン層の破壊は依然として深刻な状況にあります。このため、毎年9月を「オゾン層保護対策推進月間」とし、オゾン層を守るための啓発活動を行っています。

さらに今年は、フロン類によるオゾン層の破壊が明らかにされ、「オゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書」が採択されてから20周年になります。また、フロン類の回収をさらに徹底させるため、「フロン回収・破壊法」の改正が行われ、10月1日に施行されます。

こうした節目の年に当たり、地球環境に与えるフロンの影響を知り、フロン回収の意義について考えるシンポジウムが10月5日に東京国際交流会館で開催されます。フロン類によるオゾン層破壊のメカニズム解明により、ノーベル化学賞を受賞した米カルフォルニア大学のF.S.ローランド教授と日本科学未来館の毛利衛館長の講演や、フロン対策に関連した有識者によるパネルディスカッションが予定されています。



イラストレーション/タニダリョーコ